

李光洙の自我

——作品を通して見た李光洙の第一次留学時代の世界観——

波田野 節子

【要旨】この小論で考察するのは、李光洙の中学時代を中心とするごく初期の作品である。現在まで李光洙の初期創作については多くの研究がなされているが、それらはすべて中学と大学の二度にわたる留学時代を一括して論じており、中学時代だけを別に扱ったものはみあたらない。しかしながら、あいだに五山学校と大陸放浪をはさみ、思想的な変転のきわめて激しい、いわば李光洙の「疾風怒濤」ともいべきこの時代は、もっと詳しい時期区分による考察を要すると思われる。とりわけ李光洙が自我に目覚め、文章行為を開始した明治学院中学時代は、作家の原点としてもっとも重要な時期であるにもかかわらず、従来軽視されてきたと言わざるをえない。本稿では全集に未収の作品も含めて李光洙のこの時代の著作を検討し、それらを通して現れてくる自我覚醒の様相から、李光洙の作家としての出発点の世界観を明らかにしていきたい。本稿で対象とする作品は、一九〇八年五月から一九一〇年八月までの二年三ヶ月のあいだ、すなわち李光洙が明治学院中学四年生と五年生、および中学卒業後に五山学校で合邦を迎えるまでに発表した作品である。

はじめに

前回の論文「李光洙の民主主義思想と進化論」⁽¹⁾は、はじめの部分でことわったように、長編『無情』を読むための手続きであった。本稿も同じ手続きの一環として書かれたものである。「進化論」は啓蒙小説としての面から『無情』

にアプローチするための準備であったが、本稿は同作品を近代的自我という視点から読みとくための準備である。長編『無情』には、その時代の若者たちのさまざまな自我覚醒のありかたを描き、自我覚醒と民族意識の覚醒とをかさねあわせることで民族意識を啓発しようとする意図が見られる。とりわけ主人公が自我にめざめてゆく過程は、この作品において大きなウェイトを占めているが、その主人公が作者自身をモデルとして造形されていることは経歴の類似などから明らかであり、主人公の自我覚醒に関する部分もおそらくは作者の経歴を土台にしていることが想像される。そこで本稿では、李光洙の中学時代を中心とするごく初期の作品をできるだけ詳しく検討することで、この時期の李光洙の自我の様相を考察したい。

1

李光洙のこの時代の作品で、現在我々が目にするものには次の十八編である。※印は日本語で書かれたもの、*印は三中堂全集(全十巻本一九七一年発行)に収録されていないことを示す。

題	発表者名	発表誌
* (1) 『國文斗 漢文의 過渡時代』	李寶鏡	一九〇八年五月 「太極學報」 第21号
* (2) 『隨病投藥』	李寶鏡	一〇月 " 第25号
* (3) 『血涙』	李寶鏡	十一月 " 第26号
※* (4) 『愛か』	李寶鏡	一九〇九年二月 「白金學報」 第19号
(5) 『獄中豪傑』	孤舟	一九一〇年一月 「大韓興學報」 第9号
(6) 『今日我韓青年의 情育』	李寶鏡	二月 " 第10号
(7) 『어린 犠牲』 (上)	孤舟	" 「少年」 第3年 第2卷

* " (中)		三月 「少年」 第3年 第3卷
" (下)		五月 「少年」 第3年 第5卷
(8) 『文學의 價值』	李寶鏡	三月 「大韓興學報」 第11号
※* (9) 特別寄贈作文	李寶鏡	" 「富の日本」 第1巻 第2号
(10) 『無情』	孤舟	" 「大韓興學報」 第11号
" (續)		四月 " 第12号

(11) 『日本에 在는 我韓留學生을 論함』	李寶鏡	" " "
(12) 『우리 英雄』	孤舟	" 「少年」 第3年 第3卷
(13) 『今日我韓青年의 境遇』	孤舟	六月 " 第6卷
(14) 『꿈』	孤舟	" " "
(15) 『余의 自覺한 人生』	孤舟	八月 「少年」 第3年 第8卷
(16) 『天才』	孤舟	" " "
(17) 『朝鮮 사람인 青年들에게』	孤舟	" " "
(18) 『獻身者』	孤舟	" " "

李寶鏡は第二次東京留学時まで李光洙が使用していた幼名、孤舟は号である。

李光洙が初めて文章を載せた雑誌「太極學報」は、東京で結成された関西地方出身留學生たちによる愛国啓蒙運動の団体「太極學會」の機関誌で、一九〇六年八月から一九〇八年十二月まで通巻二十七号を出した。創刊号の會員名簿には李光洙と同じ平安北道出身で明治学院中学に在学していた文一平の名が見え、李寶鏡の名前は第四号の會員名簿に初めて登場する。第一〇号(一九〇七年五月号)會員消息欄の、「本會員李寶鏡氏は勤親のため帰国して

いたが先月二十五日東京に戻った」という記事は、天道教留學生の学資断絶(抗議の断指事件)に関する記事が第六号と第七号に見える)のためいったん帰国した李光洙が、官費留學生として再来日したときのことをいうのである。⁽³⁾ 李光洙はこのあと明治学院普通部中学三年に編入した。⁽⁴⁾

「太極学報」の編輯兼発行人は、創刊号から第十八号までを張膺慶という東京高師生物科の學生が、第十九号から終刊号までは金浴泳という人物がとめていた。この人は最初は日本工芸学校というところの電気科に入ったらしいが、のちに明治学院に移り、李光洙と同時に卒業している。⁽⁵⁾ 李光洙とは友人だったのではないだろうか。李光洙は終刊も間近い第二十一号、第二十五号、第二十六号にたてつけに作品を発表している。終刊号の第二十七号は確認されていないので、あるいはそこにも作品が掲載された可能性はある。

李光洙の著作が初めて活字となった『國文斗 漢文의 過渡時代』(1)は論説文で、ここで彼は、國民の精粹たる國語を他國の文字の漢文で表したことが今日の大韓帝國の慘澹たる状況をうみだす一因であったとし、すべてが過渡期にある現在、文字も漢文も全廃して國文を専用すべきであるという主張を行っている。弱冠十六才の少年の書いたものにしてはよくまとまっております、内容的にも当時の李光洙がすでに文学に志し、文章行為に手を染めていたということ想像させる文章だ。

次の『随病投藥』(2)は、当時の愛國啓蒙運動の特徴である「愚民觀」が典型的にあらわれた論説文である。⁽⁶⁾ 現在の大韓民族の悲惨をまねいたのは、民族の病む「猜忌」「姑息」「守旧」「依頼」という四つの病氣であるから、これを治して「外人の奴隸」を脱しなければならぬという論旨であるが、この論調は李光洙独自のものではなく、こうした病弊を克服して団体行動を行わなくては、國家の直面している危機を乗り越えられないというのが、当時愛國啓蒙運動に従事していた人々には共通した認識であった。⁽⁷⁾

一九〇八年十一月「太極学報」第二十六号に載った『血涙』(3)は不思議な作品である。後記に「譯者曰」とあるから翻訳のようだが、歴史的な記述に誤りが多く、むしろ血氣盛んな文学少年の作品のおもむきがある。副題に「ギリシア人スパルタクスの演説」とあるように、この作品はローマの剣奴スパルタクスが同胞に反乱をよびかける演説の形式をとっている。故郷で羊を飼いながら家族と暮らしていた頃の幸せな生活の回想、その幸せが征服者により一瞬にして奪いとられた悲しみ、「余の權利を剝奪した者」に対する憎しみ、そして今日、剣奴として友人と戦って殺さねばならなかった悲惨な経験を語ったあと、「同胞よ、もし諸君が禽獸のごとくならばしかたがない、だが万一人性を具しているのなら、我等の生命の為に、我等の權利の為に、我等の自由の為に起とうではないか、そうして、成功すれば我等はスパルタを再び見る事になろうし、得ざれば我等の肉片は万古不朽の宝玉となり、我等の鮮血は千秋不腐の青史と輝こう。」と「ギリシヤ同胞」に対して「美麗な川辺で、勇敢な独立の戦いで死」ぬことを煽動するのである。

グラディアトル戦争を起こしたスパルタクスはトラキア出身で、もちろんスパルタとは関係がなく、後記にある戦争の時代記述も間違っている。「奴隸」と「自由」が「禽獸」と「人性」に対比されており、あるいは日本の明治一〇年代に流行した天賦人權論的政治小説の一篇の翻訳なのかもしれないが、李光洙自身の作である可能性も捨て切れない。というのは、一九二五年に「朝鮮文壇」に発表された『나의 少年時代——十八歳少年의 東京에서 한 日記』(以下『日記』とする)によれば、この時期に李光洙は『奴隸』という小説を書いたことになっている。⁽⁸⁾ 後で述べるように、このころの彼にとつて「奴隸」という語は大きな意味をもっていたからである。また『血涙』の煽情的な呼びかけはこの一年後に書かれる『獄中豪傑』(5)や『이런 犠牲』(7)の主題に連なっている。

「太極学報」がこの一九〇八年末で終刊したのは、母体の太極学会が留學生団体の連合組織大韓興学会に参加したためである。時局に対する切迫感はそのまでの地縁中心の諸学会に一本化を促し、ついに一九〇九年一月、初めて東京の留學生団体は大韓興学会に大同団結した。機関誌の「大韓興学報」は三月に創刊号を出し、一九一〇年五月まで

通算十三巻を出した。⁽⁹⁾ 創刊号の会録を見ると「太極學報」の會長だった金洛泳は書記員になっており、李光洙の当時の「文学の指導者」洪命憲の名が編集部に見える。李光洙も太極學會から引き続いて大韓興學會の會員となったが、「大韓興學報」に作品を発表するのは第九号からである。

2

『血涙』(一九〇八年十一月)の後、『愛か』(4)(一九〇九年十二月)までの約一年間、李光洙は作品を発表していない。しかしこの空白期の前後の作品を比較すると、李光洙はこの間にかのりの文学的な修練を積んだことが推測される。「太極學報」に『國文斗 漢文斗 過渡時代』『隨病投藥』『血涙』三つの作品を載せたのは、李光洙が明治学院中学の四年生のときだった。この年四月からは山崎俊夫(一八九一〜一九八一)が同級生として編入学している。山崎はそれまで在学していた大成中学で洪命憲と親しく、明治学院中学では李光洙の友人となった。⁽¹¹⁾ 山崎の前年、三年生の二期から明治学院に編入学していた李光洙は、そこで生まれて初めてキリスト教と出会い、まもなく学校の教えるキリスト教には疑問と反感を抱いて木下尚江の小説に熱中していたが、山崎を通してトルストイの『我宗教』を知ること、いよいよ教会のキリスト教と離反することになった。⁽¹²⁾ 山崎と李光洙は中学四年と五年の二年間を級友として過ごし、卒業を前にした一九〇九年一月に、学校の同窓会誌「白金學報」にそれぞれ短編を載せた。それが『愛か』である。このとき『星狂人』という作品を発表した山崎は、後に慶応大学で永井荷風に師事し、「三田文学」や「帝國文学」に軟文学と称される類庵的な小説を書いた。そのひとつに、「李寶鏡」という朝鮮人留學生が登場する、きわめて耽美的な作品『耶穌降誕祭前夜』がある。⁽¹³⁾ 作品の中で「李寶鏡」を話題にして日本人同級生たちが示す侮蔑的な口ぶりと、自分の倒錯的な美的感覚を高揚させるため、「李寶鏡」に混血児であることを認めさせようとする主人公の無邪気な横暴さなどには、⁽¹⁴⁾ 当時の李光洙をとりまいていた陰った雰圍氣を想像させるものがある。実際、卒

業後四年もたないうちに、このような小説で実名を使われて、李光洙も快かつたはずはあるまい。朝鮮に帰った李寶鏡が東京で発行される雑誌を読むことなどないだろうと、山崎は思ったのだろうか。明治学院時代に日本人としては李光洙と一番親しかったという山崎が示すこれほどまでの無神経さは、李光洙が当時日本で体験したと思われる屈辱感と、異郷で自我に目覚め文学に傾倒していった孤兒留學生の孤独の深さを想像させる。⁽¹⁵⁾

『愛か』には、後の『尹光浩』『彷徨』『아린 벗에게』へと連なる「愛情飢渴症候群」が、濃厚に漂っている。愛情に飢えた少年が同性に向かって血書を書き、ついには自殺にいたるといふこの作品は、もちろん年齢なりに筋だても粗く、文章もつたない。だが外国語で書かれたという事実を考慮するなら、かなりの水準に達している。しかしながらもっとも注目すべきことは、のちの李光洙小説によく現れる、事実と向きあうことを避けて感情的な思い込みで行動する人物が早くもこの短編に登場することである。すなわち薄幸な生い立ちで他人の愛情を渴望している中学生の文吉(李光洙自身を反映していると思われる)は、同じ学校の学生である操を恋するが、操からの愛を確かめることができずに煩悶する。「文吉は操が自分を愛して呉ない様に感じた、操を疑っても見たが、疑ひたくはないので、無理に彼は自分を愛して居るものと定めて居た。其処に苦痛は存するのである。」そしてついに、夏休みで明日帰国するという晩に操の下宿を訪れるが、いるのかいないのか顔も見せない操に、わざと出てこないのだと邪推して激昂し、下宿を飛び出してレールの上に横たわるのである。文吉は下宿の主人に対して、「操君は居りますか」という質問を発することができない。操に聞こえるようにとわざわざ会話の声を高め、耳を澄して隣室の様子をうかがい、「何か囁いて居るのを聴い」て、「彼は確かに居るのだ」と結論を下し、「人間にして何して此んな残酷なことが出来るのだろうか」と怒りと絶望にとらわれて死を選ぶ。あえて事実をつきとめないまま自分の感情に身をまかせ、あたかもその感情の真実であること自他に証明するかのごとく自殺を選ぶ人物、こうした激情家は長編『無情』や『開拓者』『再生』『土』など、後の李光洙の小説に頻繁に登場することになる。このように主情的な人格にとって「真実」と

は客観的な事実をさす言葉ではなく、自分の感情の主観的な真剣さを意味する。初期創作の中でこの「愛情飢渴症候群」の系列に属すものとしては短編『無情』(10)があるが、因習的な結婚をして年下の夫に愛されずに苦しみ、ついには薬をのんで死ぬこの女性主人公も、その自殺の直接原因は、まだ生まれてもこない胎児が女兒であるという巫女の占いによる絶望であり、事実との対決は行っていない。

3

ところが短編『無情』と同時期に発表された『어린犠牲』(7)は、この傾向からまぬがれている。自分のマフラを敵の兵隊がしているのを見た少年主人公の祖父は、もしや彼が自分の孫を殺したのではないかという疑いにとらわれるけれども、ただちに外に孫を捜しにいき、死体を発見してから復讐を行っている。ここには事実と向き合うことに対する逡巡がまったく見られない。それはこの作品が李光洙の完全な創作ではなかったせいであろう。

「少年」誌に三回にわたって連載されたこの作品には(二)中堂全集では二回目の掲載分が脱落しているので注意が必要である)、「外国少年の課外読物」と見出しが付き「孤舟譚」とされていたのを、後になって作者自身が次のように自分の創作であることを主張したという、少々複雑な経過がある。

「その後書いたのは、翌年の『少年』三月号からだったか、『어린犠牲』というのを二号にわたって連載したのがある。これは孤舟譚となっていた。それは編集人の公六(現在の六堂)がおそらく翻訳だろうと思ってそうしたので、実は私の創作である。」

(『첫번 쓴 첫글』一九二五年三月「朝鮮文壇」)

本人がこのように明言しているにもかかわらず、『어린犠牲』を翻訳とみなす者がいたのは、同じ作者の例えば

同時期の短編『無情』などと比べて、この作品の水準があまりにも高かったせいであろう。筋にしても、西洋家屋内部や登場人物らの生活習慣の細かな描写にしても、当時としては群を抜いており、⁽⁸⁾崔南善が翻訳だと思ったのも当然の作品である。

実のところ『어린犠牲』は翻訳ではなく翻案である。というのは、原作となった映画作品があるからだ。「大韓興学报」第九号の散録に、ある映画の筋を紹介した『丹心一片』と題する文章が載っている。「普仏戦記中の一駒」という副題の示すように、映画の舞台となっている時代は普仏戦争時の一八七〇年、場所はフランスのオルレアン、登場人物も主人公はフランス人少年、敵はプロシヤ兵であるが、筋は『어린犠牲』とまったく同じであり、三部構成の分け方まで同じだ。執筆者は、李光洙とは明治学院中学の同学年で、以前「太極学报」の発行兼編集人だった金洛泳で、後書きには次のようにある。

「余はもとより活動写真を受する性癖で、ある日某所で活動写真のあることを聞いて出かけ、観劇したのだが、この光景を見てマーデン少年(主人公の少年の名前：引用者)の義死、フランス人民の盛んな敵愾心に非常に感心し、晝斎に帰って目睹した通りにここに一篇を記すに至った。ああ、プロシヤ軍の乱暴とマーシユ老人(少年の祖父の名前：引用者)の受けた辱めよ。たいてい国家が衰微した場合には、古来外敵の跋扈が思うがままであり、辱めをうける人民としては敵愾心が当然マーデン少年、マーシユ老人のごとくであるはずだが、現今某国人はかえって国家を外人に奉獻し、自ら請うて外人の獵犬となって我が血族を啗害し、我が全土を他人に譲り与えようという狂人のようなものがある。ああ、このような国民はマーデン少年を思えばいかに恥ずかしいことか。」(傍点引用者)

「大韓興学报」第九号は一九二〇年一月に発行されており、「少年」に『어린犠牲』の連載が始まるのは二〇年二

月であるから、おそらく二人は映画を見た後ほとんど同時に文章化したのだろうと推定される。だが『丹心一片』が映画の筋を追った文章であるに過ぎないのに比して、『어린犠牲』は李光洙の力量によって文学作品となりえている。当時の活動写真は無声であるから『어린犠牲』の生き生きとした会話は李光洙の想像力から生まれたものだし、舞台を北氷洋からの風が吹き下ろす北方に移したことも、荒涼とした雰囲気の効果を高めている。何よりも、当事国をフランスとプロシヤという力の拮抗した二ヶ国から、大國ロシアとそれに圧迫される小國(不明だが少年の父の名前がウルチンスキーとされていることから、ロシアに隣接するスラブ系の小國という設定だと思われる。)にしたことは、勝者による敗者へ弾圧の残酷性を強め、弱者が死をもって強者に抵抗するという悲劇は煽動性を持つことになった。被圧迫者が死をもって圧迫者に反抗するというこの作品の主題は、『血涙』と同じである。後に作者自身が自分の創作だと錯覚し、「それが完成したときひどく嬉しかったこと、書くとき非常に苦心したこと」などまで覚えていたのは、他の作品を下敷きにしながらも、こうした自分なりの独創と主張を込めることに、李光洙がかなりの力を注いだことを物語っている。とはいえ、このころ李光洙といっしょに「少年」に翻訳を載せていた洪命憲が坪内逍遙や二葉亭四迷からの重訳であることを明記し、金洛泳も『丹心一片』を活動写真を「目睹した通り」に記したものと後書きで断っていることなどに比べれば、翻案小説は原作を明らかにしないことが多かったという当時の状況があったにしても、李光洙の文章責任に関する態度は曖昧である。まして後に自作であると言っているのである。創作に劣らぬほどの情熱を傾けたために、ついには自分が生み出した作品だったような錯覚に陥ったのである。一般に、作家の回想あるいは作品中の自伝的部分をそのまま事実とみなすことには危険がともなうが、李光洙の場合はこの例の示すように、とりわけ思い込みによる錯誤に注意する必要があるであろう。

『어린犠牲』でもう一つ特筆すべきことは、敵も同じ人間であり、立場によって敵同志になったにすぎないという博愛主義の要素である。老人を迫害する敵兵に対して作者の示す、「彼らとて家にいるときは敬語を使うことも知っていたし、実行もしたのだが、彼らの着た服と帯るした剣とが、彼らにこれを忘れさせたのであろう。」という理解、また毒薬と槍とで残酷な復讐を遂げた後になって、「おまえたちだって、もともと人殺しが好きだったわけではなかったらうに。誰のせいでこんなことに……」と嘆き、「造物主よ！何ゆえに、全知全能の御手をお持ちでいながら、こんなふう互いに殺しあい、憎みあうようお造りになったのか。」と叫んで倒れる老人の心理変化は、わざわざ国の設定を変えることまでして強調した、あの復讐と反抗の煽動という主題とはあい入れず、作品中でも唐突な感じを与えている。ここにはマタイ伝の「悪に抗するなかれ」という戒律から復讐をいましめ、愛国主義を越える博愛をといいた、トルストイの『我宗教』の影響が感じられる。金洛泳の『丹心一片』では、老人は敵兵に対して憎悪と復讐心しか見せていない。原作である映画を見ない以上断言はできないが、この部分はおそらく李光洙によってつけ加えられたものと思われる。老人のこの二面性は、『어린犠牲』に二つの結果をもたらしている。一方では、敬虔なカトリック信徒である田舎の善良な老人が復讐心から犯す残酷な殺人という設定が作品のリアリティと悲劇性を増した反面、他方では、この作品の本来の主題であったはずの反抗と復讐の煽動性に水をさし、対決の構造には徹底をかくことになった。『愛か』や短編『無情』の主人公と違って、事実との対決には躊躇しなかった『어린犠牲』の主人公も、この博愛主義のために、復讐と反抗に関しては対決の姿勢に曖昧さを残すことになったことが否めない。

ところで李光洙は、東京留学時代に活動写真をよく見たのだろう。たとえば一九三一年の「三千里」で、「川外感激社 外國作品」の一つとして、「二十二年前、日本で中学校に通ったころ初めて読んだ」トルストイの『復活』をあげ、「最後に主人公のネフリュードフが……引用者)昔の恋人カチューシャのあとをおって、雪のふりしきるシベリアへと発つてゆく場面が、いよいよもなく崇高かつ深刻で、厳粛さにくたれた」と書いているが、白楽晴氏が指摘しているとおり、小説中には該当する場面がない。『復活』は一九〇八年に、「シベリアの雪」という邦題で日本で上映されている。その中では雪が効果的に使われ、その影響であろう、一九一四年の日本映画「カチューシャ」でも、最

後はシベリアでの雪のわかれとなっている(29)。こうした映画のシーンが李光洙の記憶に影響していると考えてよ
いだろう。

長編『無情』には、フェイド・インやナラタージュなど映画の技法が使われていることがすでに指摘されている(30)。次々と変化する主人公たちの意識にそった目まぐるしい場面の交替、大寫しを思わせるソソンの華やかな登場、ヒョンシクがヨンチュエとの新婚生活や他の男と寝る彼女を想像する、まるで無声喜劇映画のようなシーン、優美館という活動写真館からは大活劇の音楽が流れ、ヨンチュエ救出に向かうヒョンシクが想像する西洋活動写真のカー・チェイス、李朝小説のなごりだと指摘されている小説中の作者の言葉の直接介入は、あるいは弁士の語りを意識したのかも
もしれない。長編『無情』における当時の映画技法との関連は、一度本格的に研究されるべき課題だと思われる。

4

さて一九一〇年に入り、李光洙の初期の創作は「大韓興學報」と「少年」を舞台に高揚期を迎え、八月の日韓合邦
によって突然の終止符を打たれることになるが、この短い時期においてあらゆる意味で頂点をなしたと考えられる作
品が、一月の「大韓興學報」第九号に発表された散文詩『獄中豪傑』(5)である。『獄中豪傑』は三部からなってい
る。

梟が人間に捕えられ、檻に閉じこめられている。「板壁鉄窓狭き獄に、閉じこめられし、かの梟は、太き黒き鉄鎖
に腰縛られ、死ぬるがごとく、眠れるがごとく、体縮めて横たわれる様、あわれなり。」だが両眼は苦悶の霧でとざ
されているとはいえ、その底には雷光のような勇氣と力がひそんでいる。以前はこの豪傑に恐れおののいていた人間
どもが、鉄窓から見物して嘲弄する。その中の一人の若者が手にもったステッキでつくと、寝ていた梟はいきなり
稲妻のよう襲いかかり、若者の頭蓋骨は裂け、脳漿は無残にも梟の爪に残って鮮血をしたたらせる。大暴風が去った

後のように、梟はまたもや横たわり、目を閉じる。「あわれなり。かの豪傑よ！自由なき、かの豪傑よ！汝はもは
や生命なき肉と骨に過ぎざるのみ。」

第二部では梟のかつての自由な生活が喚起され、讚美される。人間が近づくことのできぬ雄大な自然の中で、敵と
出会えば堂々と闘い、勝てば殺し、負ければ殺されて悔いのない、決して誰からも束縛や命令は受けぬ充実した日々、
そうした不羈の自然生活と比べれば、飼い主に媚びる犬や、「大きな体と力をもちながら」「自分よりも弱い」人間に
自由を奪われて奴隷となっている牛馬は、「生きながら生命のなきものども」だと、作者は罵倒する。

狭い檻の中で鉄の鎖に縛られ、人の手から投げ与えられる死肉で細々と命をつないでいるうちに、三千獸族を俯伏
せしめたあの威敵も消え果て、梟はいまや奴隷の身に安んじる犬や鶏と変わるところがなくなってしまう。第三部
では、作者が直接その梟に向かって、奴隷でいるくらいなら、戦って死ねと呼びかける。「断て、嘴で、おまえを束
縛した鉄鎖を！嘴の擦り切れて、粉となるまで！ぶちこわせ、爪で、おまえを閉じ込めた堅固な檻を！おまえ
の嘴とおまえの爪が擦り切れ失せ、おまえの勇氣とおまえの力が衰え失せたならば、おまえの心臓にある血を撒き散
らして、死ぬのだ！」

祖国がすでに五年前日本の保護国に転落し、八ヶ月後には合邦される運命にあったこの時点で、梟を閉じこめる檻
の意味するものが何であったかは言うまでもない。狭い獄に閉じこめられたうえ太い鉄鎖に繋がれた梟の凄惨なイメ
ージには、今や独立を失おうとしている大韓帝国の姿が重ねあわされている。ここには『血涙』と『이런犠牲』に
あった煽動的な主題が、より文学的に昇華された形で現れているほかに、奴隷に関する考察が一段と深まっているの
が見られる。すなわち自分を抑圧し閉じこめている檻は外部だけにあるのではない。内部にもあるのだといっている
のが、それである。鎖につながれて檻に入れられ、自由を奪われた梟は、最初のうちは囚われる以前の誇りを失わず、
屈辱の憤怒に身を震わして歯を鳴らし、ステッキでつつかうとした若者の脳漿を砕いて殺す。しかし人間に飼われて

いるうちに、だんだんと靉氣を失い、やがては庭先の犬のあざけりを受けるまでになってゆく。閉じこめられて自由を奪われることは恐ろしいが、もっと恐ろしいのは、閉じこめられることに對する怒りと反抗の心を失い、ついには閉じこめられているということすら忘れてしまうことだ。その時、外にあった檻は自己の内部の檻となり、いつか外の檻がなくなっても、梟はもはや逃げ出そうとはしなくなるだろう。自分が囚われていること、自由を奪われていることに気づかぬもの、それが眞の奴隷なのである。檻を内部化させようとしている梟に向かつて、過去のあの自由な生活を喚起し、現実の惨めさに目覚めよ、外の檻に對して闘いを挑めと作者は挑発する。檻は頑丈で梟の力ではびくともしないかもしれないが、閉じこめられたものの自由は反抗の中にしかありえないのだから、眞の奴隷にならぬため、檻を内部化させぬためには、自由のための闘いで死ぬほかはないのだ。

『獄中豪傑』には今までの作品にみられなかった徹底した対決の姿勢がある。檻と鎖による束縛にもかかわらず、死をもって反抗することで内部の奴隷化を拒否するというすさまじいまでの対決の表明は、逆にいえば、曖昧さを残す余地すらないほど追いつめられていた当時の大韓帝国の状況を、李光洙が詩人らしい鋭敏な感性で反映させたものだったのだろう。同時にこの詩は、当時の東京留学生の間に形成されていた、ある世界観の表出でもあったと思われる。詩の最後に「嘯印生評曰 畫出眞境讀不覺長」とある。この嘯印(本名不明、一九〇四年に來日した官費留学生の一人らしい)が「大韓興学报」に発表したいくつかの論説文の中で、「奴隷犬馬の性」とか「奴隷心により同化した学生の国は滅亡する」など、盛んに「奴隷根性」を攻撃しているように、当時の愛国啓蒙雑誌には「奴隷」という文字がよく使われた。「奴隷」は中国清末の思想界においても頻繁に使用された語であり、梁啓超など中国からの影響が大きかった大韓末期の思想界でも当然この觀念は流通していたことと思われる。李光洙が『日記』に「東洋の偉人はみんな奴隷だ」と書きつけ、前述したように『奴隷』という小説を企図したのは、こうした事情と無関係ではないだろう。だが、李光洙が「奴隷」という語にこめた意味あいには、他の留學生がこの言葉にこめた、外敵に對

する奴隷あるいは奴隷状態に馴らされた奴隷の心性という意味だけではなかったように思われる。

もちろん、『獄中豪傑』の自由を奪われた梟は、独立を奪われた祖国の象徴であり、檻を内部化させるなどという叫びは、独立の氣概をもてという、いわゆる「奴隷根性」に對する攻撃であるのだが、この詩はもうひとつ、まったく別の読みとり方をすることができるとし、またしなくてはならない。すなわち、獄中で呻吟する梟は、解放と拡充を求めてもがく李光洙の自我である。自分が何かに閉じこめられていることに對する怒りと不安、なんとかしてそこから抜け出さなくてはという焦燥と破壊の衝動が、この詩からは伝わってくる。自分を閉じこめているその檻とは何だったのか、『獄中豪傑』の翌月の「大韓興学报」に発表した論説支『今日我韓青年斗情育』(6)(以下『情育論』とする)において、李光洙は人間の内部の檻だと認識したものの正体を明らかにしている。

「烈女孝婦」「忠臣烈士」が貞や忠に殉じるのは、知識として身につけた道徳の力によるのではない、と『情育論』で李光洙は言っている。もしそうであるならば、その知識を持ったものは皆その行為を行うはずだが、「知而不行」という言葉が存在することでもわかるように、知識だけでは人間は必ずしも行動に至らない。知識道徳を行動に結びつけるのは「情」であり、「情的に發達」した人間だけが、敢然と「立節死義」に赴く「烈女孝婦」「忠臣烈士」たりるのである。ところが現在の硬直した社会は人間の自然な感情の流露をばみ、人間は自分本来の「情」によってではなく、知識として与えられた社会道徳にしたがってのみ行動するようになってしまった。社会道徳からはずれば「公衆の面目」を失うことになり、それを恐れる人間は、いつしか自ら作った社会の掟を自己の内部にとりこんで、「社会制裁の奴隷」に転落している。李光洙が大韓末期の人間の内部の檻だと認識したのは、人間性を枯渇させる頑迷固陋な社会倫理の慣習的支配だったのであり、彼の「奴隷」とはその支配の下で社会の掟にしばられて人間本来の「情」を見失った人々である。「嗚呼！人類のために組織された社会国家が、むしろ人間に苦痛を与える機械となり、人間のために成立した法律・道徳がむしろ人間を誤らせる網となり筈となつた……」という嘆きは、それをさすと思われる。

このように、「情」の発露を阻害する社会慣習の束縛を告発し、梟の鎖を断ち切ろうとする意志力の源を人間の「情」に求め、「情有」の必要を訴えたのが『情有論』である。「諸義務の原動力であり、各活動の根拠地」である「情」を持つて、人は他律的でなく自律的に孝であり、忠であり、信じ、愛するだろう。その時初めて人は国のために死ぬことができる。ここに二人の韓人がいて、一人は「我は韓土に生まれ、韓土に長し、韓土に死すによって、我は韓土を愛する義務があり。」と言ひ、もう一人は「韓土よ、韓土よ、爾はそもそも何ものたるや、汝を憶い汝を懐しめば思慕恋恋とし、汝を傷み汝を哀しめば熱涙滂沱たり。」と歌うとき、そのどちらが韓山のために血を流せるか、と李光洙は読者に問いかける。

ここで留意すべき点は、『情有論』においては「孝」「忠」そのものの否定が行われているわけではなく、その倫理を行動に結びつける真摯な情の流露を妨げている社会の硬化化だけが問題にされていることである。李光洙は決して儒教倫理そのものと正面から対決してはいない。『愛か』や短編『無情』で事実との対決を回避して、重点を自分の感情の真摯に置いたように、ここでは儒教倫理との対決が回避され、その倫理を実行に移す原動力としての「情」の発動だけが問題にされている。

社会慣習の束縛そのものを客観的に分析するよりも、それを自我を抑圧するものと主観的に理解して、そこから感情的に解放されることを性急に要求するこうした心の動きは、一般にロマンティズムと呼ばれる性質のものである。李光洙はつねに民族の啓蒙に努めた啓蒙主義者であったとされているし、本人もそれを意図していたことは間違いない。しかし本来啓蒙(Enlightenment)とは、合理的実証的な近代科学精神に基いて、事物を理性の力で明らかにすることにより、不合理をただそうというものであって、今まで見てきた李光洙の作品の傾向とはそぐわないように思われる。もちろん、事実との対決をさけて思い込みで行動する作中人物を創造したからといって、作者が必ずしもそうした人格の所有者であるとはいえない。ましてそのモデルが作家自身であるならば、作家は、自己分析と自

己批判をおこなわないつつ冷静にそうした人格を創造することも考えられるだろう。しかし李光洙の場合、そのような姿勢をもって作中人物を描いているように思われたいのである。たとえば過去における作家自身の心の動きの醜さを描くときなど、まず自己嫌悪の情がさきだつてしまひ、自己を対象とした冷静な分析は見出だしたがたい。読む側に伝わってくるのは、自分の感情に翻弄されひきずられて行動へと流される苦しみ、いかに深く真摯であるかということだけである。むしろその苦しみの大きさと苦しむ態度の真剣さが、行動の方を正当化するのであって、そこに作者の理性の醒めたまなざしは感じられない。事実と正面から向きあい、それを受け入れ整理することによって事態への対応を決定するのではなく、事実との対決をさけながら、内部の心の動き(情)に流されるほうを、誠実であり真実だとみなす主人公を描いた李光洙自身、そうした性格の所有者だつたと思われるふしがある。

実際、李光洙が問題にしたのは、つねに理性の真理よりも感情の真実のほうだつたと思われる。それには李光洙の気質的なものも多分に作用していたのだろう。たとえば、この時代の留学生雑誌は総合誌であり、洪命憲や金洛泳などは科学的な論説文を書いたり、あるいはそうしたものの翻訳をしているのだが、李光洙はその類いのことはまったく行っていない。詩と小説以外の論説文は、自我と個性を主張する文学的なものばかりである。李光洙の中学時代の成績表は全体に優秀であるが、文系科目より理数系科目は劣っており、特に幾何の点数が低いことなども、彼の性向を示しているように思われる。第二次留学時代の李光洙は、啓蒙者たらんとしてこの欠点を克服しようとしていたが、初期創作ですでに明らかかな浪漫主義的気質は、最後まで変わっていない。もちろん、啓蒙主義の理想を追い求めるという傾向自体が浪漫主義的な要素であるといえるから、この二つをまったく対立的にみるわけにはいかないけれども、李光洙の文学の性格が文学史的には啓蒙主義よりは浪漫主義のほうに属するものであることは、初期の創作からも明らかであろう。この、客観よりも主観を重んじ、真実を事実ではなく自己の主観的真摯の中に求める姿勢は、たとえばつねに外的条件を考慮しながら行動すべき指導者の立場には不向きだといわざるをえない。李光洙がつねに

民族のことを思いながらついに「民族のための親日」に行きついたので、彼のこのような性格を思えば理解ができるように思われる。外から見た振幅がいかに大きかろうと、李光洙はつねに、少なくとも「内部の真実」には誠実であったのではないだろうか。

さてそれでは、『情育論』で「活動の根拠地」とされた「情」は何によって得られるのか、すなわち「情育」とは具体的には何なのか。すでに先の二人の韓人の例でも想像がつくが、それは文学であると、翌月の「大韓興学報」の『文學の 価値』(8)で李光洙は主張している。東洋では「智と意」のみ重視し「情」はこれを蔑視排斥してきたために、「情を主とする文学」も発達が遅れた。しかし西洋では「情」の存在と価値を知っていたがゆえに、文学の発達も速やかで今日に至り、それが国力の違いにむすびついた。「一國の興亡盛衰と富強貧弱は全くその國民の理想と思想いかにあるが、その理想と思想を支配するものは何か。曰く『文学である。』」

散文詩『獄中豪傑』、論説文『情育論』および『文學の 価値』という、以上の三編を並べてみると、詩と二つの論説文の間には微妙なずれが見出される。『獄中豪傑』たる梟は自分を嘲った人間の脳漿を砕いて復讐することでの尊厳を守った。その梟の覇気がじよじよに衰えてゆくのを見て作者は、閉じこめられたものの自由は反抗という行動の中にしか存在しないことを説き、反抗の潜在能力をもちながらそれを行使しようとしないう家畜に対する侮蔑をあらわにしながら、檻を内部化しないために外の檻と闘えと煽動している。つまり外的状況に対する反抗の闘争こそが、内部の自由を守る闘いであって、行動の方が先行しているのである。ところが、論説文では問題は内部の檻にとどめられている。内部の檻は社会慣習、伝統的因習を打ち砕いて「情」を回復すれば、國民は正しい理想と思想をもつようになり、その結果国力は増して外的状況は改善されるだろうという、いわば内部努力の先行という形に変わってきている。『血涙』『어린 犠牲』から『獄中豪傑』へと続いた外敵に対する死をも辞さぬ反抗という煽動的な主張は、『獄中豪傑』の梟が李光洙の自我となり、『情育論』で文学的な「情」という原動力を与えられることで、自己内

部の闘いに変容し、行動の論理から遠ざかることになった。

先に『獄中豪傑』があらゆる意味で李光洙の初期創作期の頂点をなす作品であると述べたのは、このためである。『獄中豪傑』は文学的にも初期創作期の他の作品(翻案である『어린 犠牲』は除く)を圧しているが、思想的な面でも、この時期においてある極点にたどりついた作品であると言いうことができる。というのはその後の李光洙はこの地点からだんだん遠ざかっていったと思われるからだ。『獄中豪傑』発表後、帰国して五山学校の教師となるとまもなく、早くもこの時期を「四畳半の空中樓閣」とみなすようになるし、上海亡命の帰国後に書いた十三年後の『嘉實』では、『獄中豪傑』とまさに正反対の地点で奴隷に徹する主人公を理想的に描き出し、この作品こそを自分の処女作と思いたいと述べるだろう。その十年後の『多難半生』途程』では、『獄中豪傑』の世界の共有者であった洪命憲について、「私とは文学的性格が違うことを当時から意識して」おり、むしろ自分には「トルストイのような理想主義的なものがびったりきた」と述べている。確かに李光洙は明治学院時代の初めにトルストイに心酔した。それは『어린 犠牲』を原作の映画と一部ちがわせるほどに強いものであったし、また李光洙の将来にわたって大きな影響を与えつづけることになった。だが、中学時代の終わり頃から彼はトルストイから一時的に離れて、第二次留學時には「トルストイは老衰の思想家、劣敗の思想家」と罵倒するところまで行っているのである。李光洙がトルストイにもどるのは上海帰国後のことだ。思い込みによる無意識の過去修正がここでも見られる。管見によれば、『獄中豪傑』の世界は、後に洪命憲の長編小説『林巨正』の中にあらわれることになるが、李光洙はこの小説のことを、冷淡に、「果てしなくて長い物語」と呼んでいる。

『獄中豪傑』から半年後の六月に「少年」に発表された『吾』(14)では、主人公である熊はもはや閉じ込められて

いない。

「この熊は森を歩き回っていて(自由に 自在に)

傲然と聳えるあの高い岩を見

突然自分がその圧迫を受けているような気がして 貴重な自我がその圧迫を受けているような気がして」

熊はその岩に向かって闘いを挑む。頭蓋骨が壊れ、脳漿が流れても体当たりを繰り返さし、ついに死にいたる。

「だが、あの岩は前と変わらない。(自然はすべて)」

梟にとっては人工的であった檻が、ここでは変えようのない自然の岩になっていることに、二ヶ月後の合邦をすでに予感し、それを受入れている作者の絶望感を見ることも可能だろう。熊にはそもそも自分が閉じ込められているという意識がない。熊を駆り立てたのは「自我が圧迫を受けているような気」がしたからであり、また最初から本気で岩を壊すのが目的でもない。

「もう一度言おう 彼は決して成功を期したのではない、

ただ 自我の権力を最高点にまで伸長させることなのだ。」

一見無意味な闘いに傷ついて死んでゆく熊を嘲笑する他の動物たちに、作者は語りかける。

「おまえたちが命を惜しんだとて せいぜい何年のことか。

無限の時間に比べれば五十年や、百年など、

こんな命を惜しんで貴重な自我を折るのか。

自我、自我、これ無くしては 命(人間)ではない、機械なのだ。」

二つの詩『獄中豪傑』と『吾』のあいだには、明らかな変化が見られる。『吾』では敵は自我に圧迫を加えているような気がした岩であって、いわば内部の障害物である。実際に自分を閉じこめている外部の檻ではない。自由自在に動き回っていた熊は自分の意志で岩に挑戦するのである。梟は自分を閉じこめるものに対する反抗という行動の中に自由を見出したが、熊は自我の自由のためという形而上的な欲求から行動をおこす。結果的には同じようにみえるこの二つの姿勢の差異が、実はこの後の李光洙がたどった道の一つの分岐点ではなかったろうか。この分岐点は『獄中豪傑』の主人公である梟の二重性の中に見出すことができる。独立の闘いで死のうと呼びかけた『血涙』、成長するまで待てという祖父の言葉を振り切って行動し殺される少年の『やん犠牲』、そして祖国の象徴である閉じこめられた梟にむかって、奴隷でいるくらいなら檻と闘って死ねと煽動した『獄中豪傑』では、被圧迫者が天賦の権利とする李光洙の自我であるとき、梟の闘いは、自我に圧迫を受けたような気がして岩と闘った熊と同じく、自分個人のための闘いである。それが祖国のための死となるのは、自我が伸長することを希求した結果にすぎない。鎖をひきちぎり、檻を壊して舞い上がった梟が熊に変身して自我のための闘いを始めるように、この分岐点で、李光洙は国家(『情育論』では社会慣習)から自我を切り離し、あらためて自我を中心点においた国家観(社会観あるいは世界観)を作り上げたのである。初期創作期最後の論説文『余의 自覚한 人生』(15)の中で、李光洙は自分がそれまでにたどってきた精神の遍歴過程を語って、自己の原点を「生命を維持しつづけようとする本能的欲望—生存欲」であると

規定し、国家は自分の生存と密接な関係にあるからこそ重要なのだと、国家を自己の延長線におくことによって精神遍歴の終着点である愛国主義に到達した。そして『朝鮮 사람인 青年들에게』(17)では青年たちに対し、「生の保持発展」を「今日倫理の絶対標準」として行動するよう訴え、「新大韓の建設」もまた「生の保持発展」のためなのだと言いきっている。

国家の独立の危機をむかえていたこの時期の朝鮮人にとって、個と国家、個と民族のアイデンティティは大きな課題であった。李光洙の「情」による自我と国家との結合は、その課題に対する模索の一つであったと言えるだろう。『이런犠牲』の原作である映画の中でフランス少年がプロシヤ兵に示した敵愾心に金洛泳が感激して、「国家を外人に奉獻し、自ら請うて外人の獵犬となって我が血族を嚼害し、我が全土を他人に譲り与えようという狂人のような：このような國民はマーデン少年を思えばいかに恥ずかしいことか」と嘆き、また洪命憲が昔日の党争を引き合いにして警告を發したような地域感情による団体行動の阻害は、朝鮮においてこの時代の思想が個々の人間とネーションをつなぐ内的契機を欠いていたことに起因している。この時期朝鮮で戦われていた義兵の儒教倫理は、愛国啓蒙運動の論理とあい入れる性質のものではなかったし、大韓皇帝はネーションの求心力として充分な機能を果たしていなかった。そうした大韓帝国の時代状況は、また李光洙個人の状況と重なるものでもあった。孤児であり、国を離れた留学生である李光洙は、何かを愛し何かに愛されたいという愛情飢渴に苦しんでおり、故郷で貧窮生活のうちに父母を失うという悲惨な体験を切り抜けてきた李光洙の生存本能は、生きることを希求してやまなかった。この生存と愛情に対する欲求が時代の状況と結びついたところで、李光洙の浪漫的民族主義は確立した。まず生きること、生を徹底的に肯定することで自我を確立し、つぎに自己の生存と密接な関わりをもつ国家を自我の延長として自己と一体視すること、そうすることによって、故郷で孤児として経験した共同体からの疎外感はずぐなわれ、対象を求めて彷徨していた愛は愛国主義に「停泊」したのである。

おわりに

以上、第一次留学時代の作品を通して、李光洙の自我確立の様相を考察した。明治学院中学四年生のときに、留学生雑誌にはじめて文章を發表した李光洙は、五年生の後半から本格的な文学活動を開始し、このころ自我中心の世界観を確立させた。創作は卒業後も五山学校で続けられたが、八月の合邦を契機に中断した。創作中断の理由としては、もちろん合邦によって危機に陥った朝鮮出版界の事情、精神的ショック、あるいは学校業務の過重などがあるだろう。しかし、結婚と職業生活という、祖国ではじめて開始した生活の現実性が、今までのような世界観に基づいた文学創造を李光洙に許さなかったこともあるのではなからうか。本稿でみてきたように、李光洙の文学的傾向は、現実を直視して外界と対決することで、自我の限界をきわめ内部認識を深めてゆく性質のものではなく、ひたすら自我を拡散させてその中に世界をとりこんでゆく浪漫主義的なものだった。このような傾向をもった李光洙の文学的創造力は、地に足がつかない留学生活においては自由にははたかどることができても、苛酷な現実生活の中では涸渇し、いきづまっでゆくのが、むしろ当然のように思われる。李光洙に五山学校をすてさせたのは「野心」⁽⁵³⁾だけではなく、自由な飛翔を求める彼の浪漫的な文学精神でもあったのだと思われるのである。

【付記】 本稿においても、前回同様、東京外国語大学の三枝壽勝先生からさまざまな御協力をいただいた。心から感謝をささげる。

註

(1) 波田野節子「李光洙の民族主義思想と進化論」(朝鮮学

報第百三十六輯)

(2) 白淳在「太極学報」解題 亜細亜文化社発行 韓国開化

期学術誌十三

(3) 波田野前掲論文参照

- (4) 大村益夫「日本留学中の李光洙」(朝鮮文学)紹介と研究(季刊第5号)参照。李光洙の成績表は三年生の二学期からつけられており、一学期は全科目空欄である。おそらく学年途中の編入であろうと氏は推定しているが、四月二十五日來日のこの記事は李光洙が三年生の新学期にはまにあわなかったことを示している。
- (5) 「太極学報」第三号の会事要録に「本会員金洛泳氏は本日本工芸学校電気科に入学した」という記事が見える。また「大韓興学報」第十二号会員動靜に「本会員中今年春期に卒業及び入学した氏名如左」とあり、明治学院中学部卒業者ととして李寶鏡、文一平と並んで金洛泳の名がある。(なお大成中学中退という説がある洪命憲の名前が、大成中学校の卒業者に入っている。)
- (6) 金度亨「韓末啓蒙運動の政治論研究」(韓国史研究会発行「韓国史研究」54一九八六年九月)2、民衆と義兵戦争に対する認識(1)愚民観(90頁)で、金度亨氏は李光洙のこの論文を例としてとりあげている。
- (7) 同上参照
- (8) 『日記』は一九〇九年十一月七日から書き始められている。第一日目の出だしには、三ヶ月まえに(夏休みで帰国したときであろう)筆者)釜山で日記を失ってから日記をつけるのを止めていたが、その後いろいろなことがあったのでまた日記を始めるといふ説明があり、そのあと、「まだ夜が明けていなかったけれど僕は『奴隷』の続きを書き始めた。こ

れは二週間前から始めたもので僕の処女作だ」という記述がある。同月十五日には、この作品は長編には不向きだと断念して、代わりに短編いくつかを書こうと決めている。『血涙』は一九〇八年十一月に発表されているから、ちょうど一年の違があるが、作家自身によって発表されたこの日記には発表時に作者の手が入っている可能性が高い。最初の部分に、それ以前の印象的なできごとを書き加えることは、十分ありうることだ。また、発表時に加筆されたのではないかと思われる箇所も、いくつかある。たとえば十二月六日の、「山崎君はとても親切だ。日記に彼のことを一言でも書いておかなくは申し訳ないくらいだ。」などは、そのように思われる。(一九七一年一〇月発行全十巻三中堂全集；以下全集と記す 第九卷三二八頁〜三三一頁)

(9) 白淳在「大韓興学報」解題 亜細亜文化和発行 韓国開化期学術誌二十

(10) 「洪命憲君に出会ったのは己巳年のころだと記憶しています。洪君が十九才、私が十五才の時かと思えます。その後四年間洪君との交遊は絶えたことがありませんでした。彼は文学的識見においても読書においても、つねに私より一步先んじていたと思います。バイロンや夏目漱石、あるいはチェホフ、アルツイバーシエフなどロシア作家の作品に私が接したのは洪君の導きによってでした。洪君は今も昔も誰かに何かを勧めたり進路を示したりという態度をとることはありませんが、黙って本を貸してくれることで私の文学的指導者にな

っていたと思います。」(『多難世半生の途程』全集八 四七頁)

- (11) 秋山繁雄「学院出身の作家 山崎俊夫」(明治学院「白金通信」第一三八号、一三九号 一九八〇)参照。
- (12) 「杜鶴斗」(朝鮮日報「一九三五」全集十。『多難世半生の途程』では十七才中学三年のときとあるが、注11の資料によれば山崎の明治学院編入は四年生からなので、トルストイを知ったのは中学四年生のときということになる。
- (13) 「帝国文学」大正三年一月号 一〇六頁〜一三四頁
- (14) 異国情緒に憧れる少年主人公は、在学している白金のミッションスクールで、周りからはロシア人との混血児だと思われている朝鮮人「李寶鏡」という金髪青眼の同級生と特別の関係になる。混血であることを頑強に否定する「李寶鏡」に、主人公はそうであると認めるようせまる。周囲の人々の意識の中では、混血児は日本人より下に位置する朝鮮人よりさらに下位にあり(「朝鮮のしかも混血児」という同級生の言葉がそれを示している)、「李寶鏡」に対する主人公の愛情(執着?)は、それゆえ同性と混血児という二重の倒錯性をおびていると考えられる。
- 一九八一年、亡くなる三ヶ月前に、山崎は柳尚熙氏のインタビューに答えて次のように語っている。「彼は自分の親のことはあまり話しませんでした。これは私の想像ですが、李寶鏡は朝鮮人とロシア人の混血のように思えました。目が青っぽかったり、顔色が非常に白い点からそう感じました。あ

李光洙の自我(波田野)

九五

の人は自分の親についてはまったく何も言いませんでした。」(呉英元「春園・李光洙論」「論究」第30号一九九〇)

(15) にもかかわらず、李光洙は山崎を賞賛した文章しか残していない。李光洙によって描かれた山崎のイメージは、『耶蘇降誕祭前夜』とはまったく異なっている。「山崎俊夫はその後慶応文科を卒業し、『帝国文学』等に短編作品を発表してその後消息がないが、まことに端雅で清教徒的な人物であった。」(『多難世半生の途程』全集八 四四七頁)「彼は現在はそのとう名のある文士であるが、私より一才年長で顔立ちが整っており、またキリスト教徒の家庭で育って、身と心と行いが非常に美しかった。」(『ユウ』自叙傳』全集六 三三二九頁)だが、二度目の留学時に本光洙が山崎と交友した形跡はない。(呉英元前掲論文参照)

(16) 全集十 五〇四頁

(17) 宋敏鎬氏の「春園初期作品の文学史的研究」(一九六五)は『여린 犠牲』を翻訳としている。仁根煥氏の「春園의 處女作放」(一九六二)は、春園の処女作が『여린 犠牲』であることを「첫 번 세 오기」など春園自身の文章を根拠にして主張したもの、李御寧氏の「春園初期短篇小説의 分析」(一九七四)は、『여린 犠牲』が翻訳でなく春園の創作であることを、作者の言葉ではなく作品自体の分析によって明らかにしようとしたものであるが、このように『여린 犠牲』が翻訳でないことが何度も主張されること自体、この作品を翻訳とみなす傾向の存在を裏づけている。朱鍾演氏は「李光洙의

初期短篇小説考」(一九八〇)で、「어린 犠牲」は翻訳か翻案である可能性が強いとしている。「李光洙研究下」

- (18) 金宇鍾氏はこの作品を、「李光洙の初期作品のうちでは、これは信じ難いほど傑出した作品であった。」として、その「特殊性」を認めている。(『韓国現代小説史』金宇鍾著長璋吉沢龍溪書舎一九七五) 李御寧氏は前掲論文において、作品の年代設定が世紀一七七三年であり、その時代に電柱や電報が存在していないことなどから、「春園でなくてはそんな錯誤を犯すものではない」と、西洋人の作の翻訳ではなく李光洙の創作だとしているが、それでも、「短編小説の様式という面から見るとき、『어린 犠牲』と『少年의 悲哀』が同一人の作品であると考えるのは難し」く、この小説は金東仁の『강자』や羅福香の『물레방아』よりも秀れていると述べている。なお『丹心一片』では少年主人公の父親は一八七〇年のパリ陥落のさいに死亡したことになっているが、パリが陥落するのは一八七一年五月、パリ・コミューンの敗北時である。父親の死はその頃パリでおこった国防政府と民衆の衝突のさいか、あるいはパリがプロイセン軍に包囲されている時のことであろう。『어린 犠牲』で設定された年代が、それに一世紀先立つ一七七三年であるのは、たんなる誤記かミスプリントの可能性もあるが、李御寧氏の指摘のとおり、中学生のころの李光洙が西洋史にうかつたのかもしれない。(『血涙』における歴史記述のあやまりが想起される。)
- (19) 現在調査中であるが、当時の資料がほとんどないので、

映画の特定は難しそうである。

(20) そうすると二人がこの映画を見たのは、一九〇九年の末ころということになる。なお、「少年」の編集室通寄によると崔南善は一九〇九年末から翌年初めにかけて日本に滞在し、その間に李光洙や洪命憲に会って、「少年」への作品掲載を依頼している。あるいはこの映画のことを知っていたのかもしれない。それならば、勝手に孤舟訳としたことも納得がゆくのだが。

(21) 前掲李御寧論文も、この作品における対話の秀逸を指摘し、冒頭が対話から始まる斬新な形式は、李光洙の同時代の他の短編とはまったく異っていることに驚いている。もっとも無声映画とはいえず幕や弁士による台詞はあるわけであるのちの李光洙小説でも、会話はその魅力の大きな要素となっているが、これも映画の影響ということも考えられるかもしれない。

(22) 前掲李御寧論文では、ロシアに近い北氷洋の海岸の家で、晩秋の夜にベチカや暖炉の描写が見られないのはおかしいと指摘されているが、オルレアン の晩秋という設定の映画から西洋の家庭の描写を借りたのなら、そうした疑問は解決される。

(23) 前掲『첫인 卷 七』

(24) 洪命憲は「少年」第三年第二巻に『クロイロフの譬喩談』第三巻に『書籍に対する古人の讚美』、第八巻にアンドレイ ネモエフスキーの『愛』を載せているが、第三巻の

『賛美』のあとがきに、「皆さんに申し上げたいことがあります。まず第一に、これは私が西洋書冊から直接翻訳したのではなく、日本の坪内博士の著書『文学その折々』から重訳したということですよ。次に、この先もし私が西洋のものを本誌に出したなら、皆さんはかまわず重訳であると考えてほしいのです。」と書いています。第八巻の『愛』でも、長谷川二葉亭の訳から重訳したことを明記している。

- (25) 『丹心一片』では毒薬と棍棒になっている。
- (26) 中村融訳『わが信仰はいずれにありや』(『トルストイ全集15』宗教論下 河出書房新社) 参照。当時李光洙が読んだのは、明治三六年文明堂から出版された加藤直士訳『我宗教』だと思われる。

(27) 『復活』(『創世記』)가 感激せ 外國作品——』全集十 五六四頁

(28) 白樂晴「西洋名作小説の主體的理解のために——トルストイの『復活』を中心に——」韓国現代社会叢書4 滝沢秀樹監訳「民族文化運動の状況と論理」お茶の水書房一九八五

(29) 山本喜久男『日本映画における外国映画の影響——比較映画史研究——』第一部第一章 吉山旭光の西欧文芸映画批評早稲田大学出版部一九九〇参照。本書によれば、「シベリアの雪」の最後は、ネリュードフがカチューシャとシモンソンをシベリアの雪中で結婚させる場面であり、日本で製作された「カチューシャ」の大詰めは、シベリアでの雪のわかれだという。

李光洙の自叙(波田野)

(30) 白鉄「『無情』의 史的인 位置」全集一解説。宋敏鎬「春園初期作品의 文学史的研究」(『太学社』「李光洙研究下」)。宋敏鎬氏はこの手法はすでに新小説で使用されているものであるから、こうした手法の使用が『無情』を新小説から区分するものではないとしている。

(31) 『無情』の構成面での特色のひとつは、回想場面と空想場面が非常に多いことであるが、そのような場面では会話がほとんど行われず、視覚的な描写だけに頼っているのが、まるで無声映画のような印象を与える。

(32) 当時実在した劇場。大正時代の京城地区によれば、青年会館(現在のYMCA会館)の斜め向かい、鐘路から一本入った小路にあった。なおまったくの余談であるが、現在YMCA会館の脇に優美館というナイトクラブがある。

(33) 「大韓興學報」第一〇号に載った「甲辰以後列國大勢의 變動を論ず」の中で嘯印は、自分は日露開戦の年に帝室の命を受けて留学生として来日したと書いています。一九〇四年一〇月には韓国帝室特派留学生五十名が来日しているので嘯印はその一人と思われる。(『日本留学百年史』在日韓国留学生連合会発行一九八八参照)

(34) 「大韓興學報」第八号「歲已西終에 舊韓을 送ぎ」

(35) 「大韓興學報」第四号「學生論」

(36) 伊藤虎丸「魯迅と終末論」第一部、一、(一) 清末思想界における「奴隸」という言葉について 龍溪書舎一九七五 参照

(37) 全集九 三二九頁。
 (38) 『日記』や『文學生活三十年』の中で、李光洙自身がこの論説文を『情育論』と呼んだために、通称となっている。

(39) 「烈女孝婦」「忠臣烈士」という語は、高山樗牛が評論『美的生活を論ず』の中で使用した「孝子節婦」「忠臣義士」の直接の反映と思われる。樗牛は「孝子節婦」「忠臣義士」が「君国」「親夫」に殉じる原動力は、外から強要される道徳知識ではなく、人間内部の「本能」なのだ主張した。李光洙の「情」と樗牛の「本能」はともに外部の世界と自我を対立させて自我を優位におき、人間の行動の他律性を拒否して行動の原動力を人間内部に求めたことで共通している。筆者は「李光洙の民族主義思想と進化論」において『情育論』と『美的生活を論ず』の相似を指摘し、しかし李光洙が高山に言及した文献はないと述べたが、その後、一九二四年から十月から翌年二月にかけて「朝鮮文壇」に連載された『文學講話』の中に高山の名前が引用されているのをみつけた。(全集十 三九〇頁) また、本稿の最初に提示した李光洙の十八編の初期作品のうち(9)の作文は、「進化論」執筆のときにまだその存在を知らなかったために言及できなかったが、『美的生活』の影響下で書かれたことがきわめて明らかな文章である。李光洙は『多難せ 半生斗 途程』の中で、「私が存在していた明治学院の同窓会報である『白金学報』に『愛か』という短編を載せたことがあるが、これが『富の

日本』という雑誌に転載されて新聞で話題になったことがありました。」と書いている。だが実際に「富の日本」に掲載されているのは、『愛か』ではなくて、この作文である。この作文のことは、日本でも韓国でも今まで存在が知られていなかった。そう長くない文章なので、参考のためにここに載せておく。

◎特別寄贈作文

明治学院普通部第五年(秀才)
 韓國留學生 李 賢 鏡

「前略」一體此んな不見なことをする気になったのは「人は萬物の靈長なり」なんと云ふ誤った己惚心が動機なので。「人は萬物の靈長なり」と云ふかわりには万物に異なる点がなくはならぬ。そこで道徳なるものを拵へる。法律なるものを拵へる。家屋なるものを拵へる。機械なるものを拵へる。其れで文明だの野蠻だのと騒ぐ。其處から神聖だの、卑劣だの、善だの、悪だのと勝手なものを拵へ、勝手な名前を付け、勝手な意味を附して滑稽なまねを遣り出す。其れで貧者を生ずる。富者を生ずる。性欲の満足を節減する。人生の生命なる快樂を減ずる。しては、三ち、苦み、泣き、呻く。所謂自業自得である。何を以て善惡の標準を立てたのだろう。神聖卑劣の標準を立てたのだろう。實に可笑しいではないか。若し神の旨を行ふのが、生の本務であるとせば、彼等は益々罪惡を作つて居るのだ。而して神よ／＼を呼ぶ其神に背向けて走りながら神を呼ぶ滑稽である。余は決して本能に従へば全く

苦痛というものが無く幸福ばかりがあるといふのではない。

只此れ吾人の自然であつて、而して思ふ存分時間は短からうが長からうが快樂を味ふことが出来るのだと云ふだけのことさ。快樂は吾人生存中の最大否全體の目的であるからである。然るに人間は動物でありながら、動物たらざらんとする。其處により多き苦痛が有るのだ。克己——果たして何の價値がある。恰も蛙が人のまねをして両足で歩く様なものさ。

『自然に帰れ!』此處は吾人の處るべき所ではない。此處は吾人の自由を束縛する所である。天賦の性を傷くる所である。自然に帰れ!(下略)

(40) 樗牛の『美的生活を論ず』に対しても、同様の指摘がある。「樗牛の『美的生活』論の根據をなすものは、個人的な意志・感情の解放に對する欲求であつた。それは彼なりに思索せられた一個の『自由』論であつたのである。たゞ彼の性格や感情は所詮ロマンティストとしての境界を脱し得るものではなかつたが爲に、この内的な自由の追及は『學究』『道學者』の項末主義といふ假裝敵に對する浪漫的な反抗にすり替へられ、何ら深化されることがなかつた。又人間性を抑壓する形式主義への反抗が、普遍的な社會的自由の主張へと昇華せず、孤立化してしまつたところにも樗牛の美的生活論の本質的な弱点があつた。」(樗牛の個人主義)重松泰雄「國語國文」第二十二卷第五号) 李光洙と類似する人間の文學的資質を持つていたように思われる高山樗牛に關するこの論文は、李光洙文學の傾向を理解するにあつて、大きな示唆を与え

李光洙の自我(波田野)

てくれた。

(41) 浪漫主義に關しては、吉田精一著作集9「浪漫主義研究」桜楓社一九八〇、および片岡良一『日本浪漫主義文學研究』法政大學出版局一九五八を参考にした。

「啓蒙主義の特色として、第一は人間社會の無限の進歩を信じる無限追及の精神、第二に功利的、実用的、科學的精神を尊重するプラグマチックな思想(引用者)第三の特色として徹底的な自己意識にもとづく個人主義と自由主義があげられる。封建体制の形式、伝統、因襲の尊重に對立するものであつて、これについてはいまさらいうまでもない。ただ啓蒙思潮のみとめた自我、個性は、合理化され、制限されたものであつて、自己を主として客觀的な独立人格——政治的・社會的、かつ道徳的立法の客觀的對象——と感ずるものであつた。世界と人生を内部から、主觀的に理解しようとする自我の能動性はまだ十分に考えおよばないものであつた。それとは逆に自我を人生の中心に据え、個性の人生における絶対的價値を自覚して、その自由な表現を願望するところに、眞の近代文藝精神、とくに浪漫主義精神の自覚がはじまるといふべきである。」(吉田精一前掲書 総論2 浪漫主義の成立と展開(一) 啓蒙思想) 傍点引用者

(42) ここで筆者のいう「啓蒙」とは、もちろん「蒙を啓く」という文字通りの意味ではなく、文學史的な意味におけるそれである。たとえば 쿨미사친(민중서론)の「啓蒙」の項の、次の三通りの説明のうち、3の意味においてである。

- 1、幼い子供や知識のないものに道理を教えること。
 - 2、精神蒙昧な状態を啓蒙し開化に導くこと。
 - 3、(史)人間の心を因習的な既成觀念から脱却させ、事態に即応した自主的、合理的な認識をもたせて啓蒙すること。
- とくに近代ヨーロッパ思想史上の啓蒙主義に立脚した合理主義的開化運動。(傍点引用者)

李光洙の啓蒙主義とは「情」を啓蒙して自主的な認識をもたせるものではあつても、合理的な認識をもたせるものではない。したがって1や2の説明には該当しても、3には部分的にしか該当しない。韓国で李光洙の文学が啓蒙文学と呼ばれるばあい、2の意味によるのが普通である。金鵬九氏は「新文学初期の啓蒙思想と近代的我自我」(太學社「李光洙研究上」所収)において、李光洙とフランスの啓蒙思想家ヴォントゥネルとの比較を行い、李光洙の「甚大な量の論説の中から啓蒙思想家と呼ぶにたる最小限度の哲学を見出すにも非常な困惑を感じないわけにはいかない。」(一〇八頁)と述べて、李光洙の啓蒙思想が哲学的根拠を欠いていることを指摘し、「彼を啓蒙思想家と呼ぶことはできないという結論」(一二三頁)を引き出している。しかしながら氏は「啓蒙」という語の使い方をはっきりと定義していない。たとえば、「彼を啓蒙思想家と規定すべきか?諸家の証言と彼自身が明らかにしたところの彼の意図から見て、いったんそのように仮定してもよいだろう。」(七六頁)の「啓蒙」も、「社会全般にわたって論筆をふるい批判し啓蒙し時流と民衆を動かし、あ

る方向にひっぱっていかうとする先導者——それをまさに啓蒙思想家と呼ぶ」(一〇七頁)の「啓蒙」も2を意味している。李光洙が啓蒙思想家でないという氏の結論は3の意味においてであることを、明確にすべきであると思われる。鄭明煥氏が「李光洙の啓蒙思想」(同書下所収)で、李光洙の啓蒙思想が「いかなる哲学的体系によっても秩序化されていない」(二六六頁)ことを指摘しているのも、李光洙が3の意味における啓蒙思想家としての資格を欠いていることをいうものである。両氏ともに韓国の歴史的条件が啓蒙主義に特殊な形態をあたえることになったことを指摘しているが、その特殊な形態の一例が李光洙の啓蒙思想であろう。宋敏鎬氏の「情的自覚による啓蒙」あるいは「本能の啓蒙」という語〔春園의 習作期作品과 長編『無情』同書下所収〕は、李光洙の啓蒙思想の特徴をもっともよく表していると思われるが、理性ではなく情や本能で啓蒙するという発想自体、3の意味の「啓蒙」とはなじまないものである。

(43) たえば金洙洙は「太極学報」に「東西兩洋人の数学思想」、「童蒙物理学講談」や「世界文明史」を訳述連載しているほか、「鶏病簡易治療法」などの文章がある。洪命憲も自然科学の方面に進みたかったと自分で語っているほどであり(洪命憲・薛貞植対談記「新世代」23号一九四八「林巨正의 개조명」사계철을판사一九八八所収)、「大韓興学報」第四号に「原子分子説」を抄訳している。第五号の「地理上小訳」のMH生も洪命憲のイニシャルではないかと思われる。

- (44) 前掲大村益夫論文参照。
- (45) 『金鏡』全集一 五七〇頁。
- (46) 李光洙が五山学校時代に抄訳したのがストウ夫人の『アクトルムの小屋』であるという事実は、『嘉實』への方向づけが、このころすでになされていたことを示唆しているように思われる。
- (47) 「しかし私が真実処女作の喜びを味わったのは、三年前『東亞日報』に掲載した『嘉實』の原稿が完成したときである。これを終えたときは本当に嬉しかった。他人がこれを何と言おうと、私にとってはこれが処女作であり、最初の息子である。」(前掲『첫 번 세 글씨』一九二五)
- (48) 全集八 四四七頁。

- (49) 『爲先獸가 되고 然後에 사람이 되라』全集十二 二四四頁。
- (50) 「その後K(洪命憲の号可人のイニシャル:引用者)は安南から印度、南洋を回ってきたが、旅行記ひとつ書かなかった。それを書いてどうする?という態度だった。彼は三三度監獄にも入ってきたし、小説も果てしなく長い話をひとつ書いたが、ついに終わらないでしまった。」(『나의 自叙傳』全集六 三五五頁)
- (51) 「一塊熱血」(大韓興学報)創刊号)
- (52) 前掲波田野論文参照
- (53) 『余의 自覺과 人生』全集一 五七七頁。
- (54) 前掲波田野論文参照

(新潟大学非常勤講師・新潟市関屋下川原町一—四八〇)